

はじめに-----03

第1章 定住性の新傾向-----	05
1-1 近郊の移動の変動-----	06
1-2 定住性の質的転換-----	15
1-3 新しい定住志向の規定要因-----	20
1-4 現住居定住性と地域定住性-----	28
1-5 大都市居住者の生活観-----	36
1-6 定住願望と仮り住まい意識-----	40

第2章 領域性と愛着性-----	47
2-1 領域性-----	48
2-2 うちとそと-----	54
2-3 公共の場への愛着と関心-----	62
2-4 公と共-----	67
2-5 連帯の領域-----	71
2-6 連帯による制御-----	74

はじめに

愛着性と定住性に関する継続研究の報告書の提出も、今回で三回目を数える。

今年度の研究内容としては、まず最初に、定住性の新しい傾向について述べている。すなわち、生活水準の向上によって、人々の自己実現の機会を求める移動性がある一方、本来の定住性をも望んでおり、この両者は併存すべきことを、定住意識や仮り住まい意識などを手がかりとして論じている。第二に、人間なら誰にもある「なればり」ともいわれる「うち」と「そと」とを分ける意識について検討し、「そと」なる場所に公共心や連帯心をもつのが、自己の住居のみならず、その周辺の地域への愛着性を育むことを述べている。第三に、近代を省み、近代化とは技術による合理性や経済性、また画一性を重んずるあまり、人間の実在感を軽視する方向に進んできたために、場所への愛着性をもち難くしてき

第3章 愛着性のある町づくり-----	77
3-1 近代化再考-----	78
3-2 軽意欲の復権-----	84
3-3 機能の混在併存-----	89
3-4 界隈の良さ-----	94
3-5 ポスト・モダニズムから-----	96

第4章 愛着性から快適性へ-----	100
4-1 町並みと景観-----	101
4-2 アメニティへの展望-----	104
参考文献-----	111
付 梗概-----	114

た、という批判的観点から考察している。そして最後に、愛着性とも関連のある快適性を展望し、様々な要素が地域に馴染むことが、これを実現させるためには不可欠であることを説いている。

今回の研究では、本来なら自らのデータを作成すべきところ、既存の研究や諸種のデータ、あるいは関連する学説などを参考にし、また引用しながら論をすすめた。来年度には、今回までの一連の考察が、はたして実効性のある場、つまり場としての快適性をもたらすかどうか、実態調査を通じて検証していきたいと思っている。

なお本研究は、財団法人・第一住宅建設協会からの委託による昭和57年度の研究である。この紙面を借りて、関係各方面の方々に深く謝意を表したい。

昭和58年3月
早稲田大学名誉教授 武 基雄